

## 〔大地震曆年考〕地震略説

菱洲山人編

西洋の窮理の説に、大地の震動するは、その源は地下にある火坑より發す、火坑は全地球の中にあまたありて、吾邦の中にその源二ツあり、一ツは中州信陵豆相一ツは蝦夷の地にありて、その火脈遠く異邦までもおよび、火坑の形狀はたとへば埋み火の如く、自然に地氣を蒸あげて、萬物これが爲に生育す、此故に先地震はじめて發する時、煙氣地上に蒸騰て、暫時のうちに空中を掩ひ、星宿光輝を失ふをもつて驗とす、その今まのあたり見聞し、常に形容をみる者は、信州、肥州、薩州、日州、豆州等の山々、その外尙多し、火脈の流通せざるは魯西亞國の東南の地、亞米利加國の北の地方に多かり、これらの地は荒漠<sup>あれは</sup>て、草木すら生育せず、火氣の流通せる地方は、殊に膏腴にして萬物肥繞す、これ造物者の奇巧なるかな、しかれどもかくの如き廣大利用をなす者は、害を生ずるも又極めて大なり、地震津浪のるい是なり、前に語る火坑全地に壓仰られ、至て至靜なるもわづかに空氣の通へる事あれば、焰氣これが爲に發動し、大地を震動す、甚だしきに至りては、山嶽をも震ひ崩し、砂石を噴起し、民家を敗り、衆人害を蒙り、山河陵谷所をかへるにいたる、遠くは意太利亞國の一都會、地下に埋没<sup>うもれ</sup>て、人民草木畜るいこと、く盡たり、近時吾邦の越後、信濃、畿内、紀伊、伊勢、伊賀、伊豆、駿河などの地震津浪あるこれなり、火脈は一條より幾條にもなるがゆゑに、隣國に相接の地、損害多かり、これは火氣に當ると否らざるによれり、神社佛閣の破損少きは、礎の距度、棟梁の高低、尋常の家造りに異なる故なり、洪浪もまた火氣の海底に噴起りて、海潮これがために勃蕩するにて、地震すること、洪浪かならず起るといふ理ありといふにはあらず、ただ火氣の海中に起るとおこらざるによれり、あるひは地震の爲に洪水をおこすものあり、これは火氣發動するが爲に、山脈を毀ち、地下を通ふ水源を沃ぎ、川谷を注<sup>ぎ</sup>るに起る、また洪浪のるいは、山谷の狹隘<sup>せま</sup>き地は害多く、平坦に開豁<sup>ひら</sup>たる地は害少なかるべし、その理いかんといふに、狹隘